

## 栄光の裏面

### ——ロクサーナの生き方

#### 一 行動の原動力

ロクサーナ (Rokana) は、破産した夫が逐電した後、五人の子供を抱えて貧窮のどん底に陥るが、女中エイミーの達者な画策によって、子供たちは親戚に引き取られる。しかし、貧乏は度を増すばかりで衣食にも事欠くようになる。ところが、ロクサーナの美貌に惹かれた家主が、彼女に親切な態度を示すようになり、家賃のかたに差し押えた家具も返してくれ、部屋や庭も見違えるほど立派に手入れをしてくれる。また、経済的援助も与えてくれる。家主は

#### 宮崎 孝 一

こうして彼女に感謝の気持を懐かせ、やがて彼女に求婚する。しかし、法的には、ロクサーナは夫が同居していないとは言え、有夫の身であり、家主も、妻が身持ちが悪く家を離れてはいるが、独身とは言えず、二人とも、結婚の資格はないのである。ロクサーナはこの事情は十分承知しているが、結局彼と同棲することになる。

彼女はこの経緯について次のように言っている。

こうして、男性から受けた恩誼を有難く思う余り、信仰心も、神への勤めも、貞操や淑徳への顧慮もすべてかなぐり捨てて、二人は夫と妻と呼び合う仲になりました。神と国との掟によれば、私たちは姦通した男

女、つまり娼婦と間男に過ぎませんでした。……私の境遇が誘惑を生んだのでした。過去に経験した恐怖の方向が、将来に控えた恐怖より、一層こわいものに思われました。パンがなくなり、前に陥っていた恐ろしい困難に追いこまれるだろうという暗澹たる想像が、私のあらゆる決意を抑えてしまい、先ほど申しましたように彼に身をゆだねることになったのでした（四三頁）。

このように、ロクサーナは、家主と不倫の関係に入った理由を、貧に迫られること、生きて行くために已むを得なかったこと、いわゆる“necessity”によるものとしていえる。これは、モル・フランダーズが悪事に走る場合の自己弁護と共通するものがある。

さて、この家主は宝石商で、商用のためにロクサーナも連れてパリに渡るが、夕方外出した折、彼が身につけていた宝石を目当ての暴漢に襲われて殺害される。彼の死後には莫大な財産が遺され、それはすべてロクサーナのものとなる。従って、ロクサーナの不法な男女関係の理由が、単に貧を恐れてのものだけだったら、彼女は、宝石商の死後、この遺産を頼りに静かで豊かな独身生活を楽しめばよかつ

たはずである。ところが、彼女の男女関係は、ますます並はずれた、激しいものになっていく。

宝石商が外出した際、会うことになっていたのは、フランス王室滞在中の、さる国のプリンスだったが、プリンスは自分にも責任があると感じて、未亡人となったロクサーナを弔問に訪れ、彼女の美貌の虜となり、彼女に惜しみない贈り物と贅辞を贈り、ついに自分の情婦にする。この間の事情については、ロクサーナは次のように語っている。

貧乏と困窮は貧しい女を陥穽に導く抵抗できない力があります、他の種類の女にとっては虚栄心と高貴さが抵抗できないものなのです。王子によって、しかも最初に恩恵を与えてくれ、後には愛を告白された王子に求愛されること、美人だ、フランス第一の女性だと言われ、王子のベッドに侍するのにふさわしい女として扱われること——こういうことに超然としていられるのは、虚栄心も墮落の兆候も全然持たない女だけでしょう。ところが私は前に申しましたように、その両方をたっぷり備えておりました（六四—五頁）。

すなわち、プリンスとの場合には、虚栄が彼女を動かす大きな原動力だったわけである。

プリンスとの関係は八年間続くが、プリンスは妃の逝去を機に軽佻な生活を改める気持になり、ロクサーナと別れることになる。そこで、自由な行動に入るために、ロクサーナは宝石商から遺されて持っていた数々の宝石を処分しようとして、あるユダヤ人に会うが、彼は、これは盗品だと言ひ張り、種々の手段を講じて、宝石を彼女から巻き上げようとする。そこで危難を逃れるために、彼女はバリ在住のオランダ商人の援助を借りて、全財産を手形に変えて急遽オランダに渡る。暫く経ってオランダ商人も彼女を追つて来て、二人の間には肉体関係が生じる。しかし、彼女はこの商人と結婚しようとはしない。その理由は、女は結婚すると財産はすべて夫に任せなければならない、自分は既に二万ポンドも持っているのに、それを捧げるのは馬鹿げているという考えであった。この気持ちを知ったオランダ商人は、結婚しても、あなたの資産には一切手を触れないと誓うが、ロクサーナは今更引つ込みがつかず、次のように主張する。

「たぶん私の結婚に関する考えは、世間公認の習慣がよいとしているのとは異つてゐるかもしれませんが、私は、女性も男性と同じく自由に行動できるもので、

生まれながらに自由であり、適当な身の振り方を考えれば、その自由を男性同様に適切に利用できるものだと思います。事實は、結婚の掟はそうなっていないので、唯今のところ、男性は全然別の法則によつて行動しています。この原則によれば、女性は一且結婚すると完全に自分を投げ出してしまい、精々女中頭ぐらいの身に甘んじることになります。女性は男性にとついだ時からイスラエル人の召使たちと同等のものになります。彼等は耳に穴をあけられ、戸口の側柱に釘で留められたといいますが、そうすることによつて、生涯召使として身を捧げる約束をしたのだということですよ。

つまり、結婚の契約の本質そのものが、自由も、財産も、権威も、あらゆるものを男性に捧げることに外ならず、女性は結婚したが最後、単なる女、すなわち奴隸になるのです」(二四七—八頁)。

こうして、この時の二人は別れることになる。過去に陥つた赤貧の苦難と屈辱に復讐するかのように、今の彼女は何よりも、自分の財産を確保し、更に増すことに、食欲とも呼ぶべき執心を抱いてゐるのである。

オランダで九カ月を過した後、彼女はロンドンに渡るが、その頃の自分については次のように言っている。

私はお金持ちで、美しく、感じがよく、まだ年を取ってはいませんでした。男性に対して、最高の男性に對してさえ、その心を捉える力が自分にあることを多少経験していました。あのプリンスが、あなたはフランス中で一番美しい女性だと恍惚として口にされたことを私は決して忘れませんでした。私は、ロンドンで異彩を放つことができ、優雅な姿を誇示できることが分かっていました。どう振舞えばよいかには自信があり、既に宮様に愛されたからには、今度は王様の情婦になっても至当だと思いました（一六一頁）。

ロクサーナが此所で自認している虚栄心、自負心、そして貪欲が、ペルメル (Pail Mail) 街における彼女の華美で淫靡な営みへと導いたのであった。ペルメルの彼女の宏壮な邸には、遊びを事とする貴顕淑女たちが連日連夜訪れるようになり、仮面舞踏会や賭け事が夜の更けるまで催される。ある夜、彼女がトルコ衣裳をまとい踊った異国風の華麗なダンスが絶賛を浴び、ロクサーナの名は上流社交界に喧伝されるようになり、彼女の艶名は高まるばかりであ

る。ついには彼女は王の情婦となって三年余を世間を離れて暮らすことになる。彼女の富はますます増え、彼女の虚栄心も最高度に満足させられたわけである。この頃のことを彼女は次のように語っている。

一万四千ポンドの財産から生ずる利子を遣わずに貯えて、ふえるに任せて置いたものや、約二年間にわたって催した華やかな仮面舞踏会の折々に、単なる挨拶として贈られた結構な謝礼、また、あの最高に豪華な隱棲生活と呼ぶべき三年間に私が得たものを合わせる、私の最初の財産はたつぷり二倍になり、そのうち約五千ポンドの現金は手許においてありました。それ以外に、人からいただいたのや、人を招く場合に備えて自分で買った、たくさんの食器類や宝石がありました。

一口に申しますと、今や私の財産は三万五千ポンドに達していました。そして、元金も利子も遣わずに生活する方法を会得してましたから、毎年利子の中から少なくとも二千ポンドが残り、それを元金に加えました（一八二頁）。

なお、ロクサーナは、ロンドンで資産の増殖を図るの

に、サー・ロバート・クレイトン (Sir Robert Clayton) の指示を仰いでいる。クレイトンは実在の人物で、蓄財の上で貪欲、破廉恥なので悪名が高かった。デフォーは彼を嫌い、彼のやり口を非難する詩も書いていた。このことについては、ノヴァク (Maximilian E. Novak) の研究に詳しく、売春によって産を成したロクサーナにとって、クレイトンはまことに恰好な相談相手だったと言えよう。

## 二 ロクサーナの男性に対する態度

十五歳のロクサーナが嫁いだロンドンの醸造業者は、ハンサムでダンスがうまいという以外、取り柄のない怠け者であった。彼女は、夫が頭の弱い頼りない男だったことについて次のように言っている。

ハンサムで快活な男だからというだけで彼を選んではまったのは本当に不幸なことでした。他の点では、頭が鈍くて空っぽな、教養のない男で、どんな女性と一緒にになりたいとは思わないような人間でした。

……私の同胞、この国の若い婦人方に、老婆心までに申し上げます。もし、あなた方が将来の幸福について

何らかの関心をお持ちなら、夫と仲よく暮らすつもりがおありなら、自分の財産を維持し、たとえ何かの不運に遭っても、またそれを取り戻そうとお望みなら、いいですか、決して馬鹿とだけは結婚してはいけません。どんな夫でも、馬鹿よりはましです。他の種類の夫を持つても不幸になることはありません。しかし、馬鹿を夫にしたら目も当てられません。くだいようですが、他の種類の夫を持つても不幸になることはありません。ところが馬鹿と一緒にいたら不幸になること必定なのです (七一八頁)。

この夫に対するロクサーナの口調が冷酷で軽蔑に満ちているのは、彼女を困窮と不幸に陥れた男のことゆえ当然と言えようが、では、彼女が、その後につき合う男性に対する態度はどうであろうか。

彼女を経済的苦境から救ってくれた家主に対して、ロクサーナは感謝の念は確かに持っていた。しかし、どの程度の愛情を抱いていたかは甚だ疑わしい。彼女が、自分の見ている前で、女中のエイミー (Amy) を家主と同衾させることは、彼女の心の内を示すものであろう。

私が自分を妻と考えていたら、自分の夫を喜んで女

中と寝させる、まして、自分の目の前で（私はずっと傍に立っていたのです）そんなことをさせるなどということはとてもできなかったでしょう。ところが、私は自分を娼婦と見なしていましたので、自分の女中も娼婦にして、私を責めることができないようにしてやろうと、ひそかに企んでいなかったとは言い切れません（四七頁）。

ロクサーナ自身の言明を敷衍して、この行動は、召使に對する主人の支配力を維持するためのものだったというのが、ブラム・ダイクストラ (Bram Dijkstra) の説である<sup>(2)</sup>が、そうだったとしても、やはり家主を愛していたならば、こういう挙には出なかったであろう。

では、次に彼女がその情婦になるプリンスに對しては、どういふ氣持を持っていたであろうか。身分が高く、極度に金離れのいいプリンスに對して、彼女が崇敬に近い氣持を抱いていたことは推察されるが、二人の關係については、彼女は冷徹な見方をしている。イタリアへ旅行したとき、プリンスが、名所旧蹟を残らず彼女に見せようとし、あらん限りの心遣いをしてくれたことに關し、彼女は次のように言っている。

結局は苦い氣持で捨て去らなければならないに決まっている女に對して、このようにして、何と貴重な努力が浪費されたことでしょうか。身分の高い、様々の才芸に秀でた方が、何と御自身にふさわしくない行動を取られたことでしょうか……。

殿下がその人に教育を与え、知能を伸ばす正当な理由のある娘とか妻に對してでしたら、殿下のお心遣いは賞賛すべきものでした。ところが、売女に對してこんなになさるとは！ 冷静に見て納得できるような何の根拠もなしにお連れになった女、人間の弱点の中の一つ卑しいものを満足させるだけの女に對してです。これは解しかねることでした（一〇一—二頁）。

ロクサーナは、プリンスの愛情を忝けないものに思わないわけではないが、無批判に喜んでいるわけではなく、二人の将来の運命を冷静に見通して、プリンスの実りのない努力の無益さに言及しているのである。また、次のようにも言っている。

私が殿下から受けた愛撫や、また、あの宝石商から受けた愛の印を、こんなにまで詳しく述べましたのは、……邪悪な欲望の虜になった男性のありのままの

姿を描きたかったからなのです。……欲望に駆られた男性は、自分の魂の中の神の御姿を汚し、理性の権威を奪い、良心が王座から逃げ出すようにさせ、その空になった王座に官能を据えるのです。つまり人間の本性を退けて、獸性に支配権を与えるのです(七五頁)。

前に見たようにロクサーナが男性において求めるものは、まず富であり、次に虚栄心の満足であって、愛そのものは、さして関心がないことが、この言葉にも表われている。

王との関係については、ロクサーナはみだりに話題にすべきでない高貴な方だからという理由でコメントを慎んでいるが、王との関係が切れた後、交渉を持つようになった老貴族に関しては、一層露骨に彼女の心底を示している。彼が愛について長々と語り、彼女との関係を望むのは愛に基づいているのであって、あなたのような莫大な財産のある人に経済的援助を申し出るのは、失礼かもしれないがと、遠慮がちに言うと、彼女は次のような率直な感想を抱く。

私は心の中で言いました「お馬鹿さんねえ、……売女に身を落としたながら、自分の醜行の報酬を受け取るの

をこぼむ女なんて世の中にいるのですか。覚えてらっしゃい、閣下が私から何ものでも受け取るなら、それに對して、支払いをしなければならぬのですよ。

私がそんなにお金持ちだと知ったら、それだけ値段が高くなるだけの話です。年二千ポンドの資産のある女に、はした金を出すことはできませんからね」(一八三頁)。

ロクサーナが男性を人間として愛するよりも、そのもたらす富または榮光に主眼を置いていることは、ロンドンで偶然再会したオランダ商人に對する彼女の反応に更に顯著に示されている。このときのロクサーナは、かつての奇矯な女権論も捨て、この商人と結婚することに心が傾いている。ところが、その後のバリの情報を得るためにフランスに送って置いたエイミーから、前に別れたプリンスが、再びロクサーナを恋しく思うようになり、彼女を妃に迎えることを考え、彼女を探しに侍従をイギリスに派遣しようとしているという手紙が来る。すると忽ちにロクサーナの心はプリンスの方に移る。

妃殿下になって、この土地で起ったことは誰にも知られず、(良心の問題さえ除けば)自分の記憶からさえ消え

去る国へ行って住むというのは、思っても魅惑的なことでした。召使たちに囲まれ、榮譽ある称号を受け、妃殿下と奉つられ、壮麗な宮廷に住み、さらにそれにも増して、私を愛し大事にしてくれることの方かっている高貴な方の胸に抱かれる——これらすべてが私の目を幻惑し、頭をおかしくさせました。……

その次に私の商人が会いに来たときは、彼など眼中にありませんでした。こんな人など初めから相手にしなければよかったです。そして、もうこれからはこの人には口をきくまいと決心しました(二三四頁)。

このように、プリンスについての新しい情報が入れば、ロクサーナのオランダ商人の遇し方は忽ち変わるものであって、深い愛情など感じていないことは明らかである。

### 三 ロクサーナの悔恨

ロクサーナは、自分の生き方を語る途中、所々で自分の所業について悔恨の言葉を述べている。それは語られている事柄の行われている時間とほとんど併行している場合もあり、また、過去を振り返って自分の行動を批判している

場合もある。

家主と同棲するようになったときは、次のように言っている。

私が彼の言うことをきいたのは、それが正当なことだと信じるように丸めこまれたからではなく、彼の親切に圧倒され、また、もし彼に捨てられた場合の自分の惨めさを恐れる気持ちに戦たたかいたからでした。ですから、百も承知の上で、良心が目ざめたままで罪を犯したので。罪だと知りつつ、こぼむ力がなかったのです。こうして、心にぼっかり穴があいた感じで、自分の良心の導きも顧みず道を踏み外すほどになり、良しと、もうどんなことでもこわいものなしになり、良心は耳を貸してくれぬ者には語っても無駄だということとで沈黙してしまいました(四四頁)。

このくだりは、どちらかと言えば、年月を経た後に往時を顧みて語っている観があるが、誘惑に対する、当時の自分の無力さを述べている。

また、次のようにも言っている。

私はいかに厚かましくなっても、そして私の厚かましさはいかなる悪女も及ばないほどのものでしたが、そ



れでも、やはり不安を感じずにはいられませんでした。時々ふと暗い想いが我にもなくしのび込む折があり、歓楽のさ中に溜息がもれ、また、あらゆる喜びの合間に心が重く沈み、涙が湧いてくることもしばしばでした（四八頁）。

このくだりは、行動の行われている時間と併行しており、前の引用が自分の良心の無力さについて述べているのに比し、良心の疼きについて語っているが、しかし、この心の痛みも、彼女に自分の行動を改めさせるだけの作用はしていない。

ともかく、ロクサーナは自分の男女関係について心から満足しているわけではなく、右に見たように悔恨にくれる折々もある。その事情について繰り返し述べるのは、自分がこの行動に入った動機を読者に分かってもらい、また、自分が売女的身分に得意になっているわけではないことを知ってもらって読者の同情を買おうという目的からであると思われる。つまり、作者がそう目論んでいるのである。左に挙げるのは、その代表的な例で、プリンスとの交渉の時期における感想である。

ほんの数年前までは自分の身の上がどんなだったか

を私は忘れませんでした。悲しみに打ちひしがれ、涙に浸り、乞食になる運命におびえ、ぼろに包まれ、父親を失った子供たちに囲まれていた私、身にまとったぼろを、食物を買うために質に入れたり、売ったりし、床に坐りこんで、援助も望めず、餓死を待つばかりで、やがて子供たちは教区の厄介になるために連れて行かれた私、その後では、パンのために売女になり、良心も淑徳もかなぐり捨てて、他の女性の夫と同棲した私、完全に孤独で、見捨てられ、施す術もなく、餓死を免れるためのどんな僅かな助力も得る道を見知らなかった私、その私が汚れた体を臆面もなく提供する栄養によって殿下に愛撫されるとは！ 以前は殿下よりはるか賤しい人間どもと同列で、ちょっと前までは、殿下の下僕の求めでも、それによってパンが得られるなら、こばもうとしなかった私なのです（七四頁）。

ここで彼女は、自分の置かれていた境遇の惨めさをつぶさに語ることによって、自分のその後の行動への読者の批判を和らげようとしているのである。殊に終りの方の、「下僕の求めでも……こばもうとしなかった」というくだりで

は、リチエティ (John J. Richetti) も言っているように、<sup>(8)</sup>  
ロクサーナが自分に対して極度に厳しい批判をして見せて、読者が、「いや、それほどにまで墮落してはいなかったらうよ」と寛大な気持を持つように誘おうとしたのであらう。

物語が終りに近づくにつれ、ロクサーナも数々の男性遍歴の末、自分の所業についてこれまでよりも深刻に考えるようになる。そして、すべては悪魔の仕業だったのだとする折もある。

ああいう成行きは悪魔が仕組んだので、私を屈服させ  
たばかりか、それを根拠にして、私があらゆる反省を  
受け付けない気持にさせ、私がいまだ恐ろしい  
道を、まるでまともで合法的な道であるかのように進  
むようにさせたのです (二〇二頁)。

こう言いながらも、彼女自身が、悪魔に責任を帰すること  
の不合理さに気づいている。

これは口実に過ぎず、自分で持ち出したことですが、  
とうてい満足な説明にはなっていないませんでした。……  
今となっては、悪魔だって弁解の役には立たず、答え  
として役立つどんな理由も思いつかせることはできま

せんでした。「今、何の必要があつて売女の生活をす  
るのだ」という質問に対する、ほんのおぞなりの答え  
にもなりません (二〇二頁)。

ロクサーナが、自分の売女稼業に消極的態度を取るよう  
になったのは、年齢の影響もあつたことは確かである。王  
の情婦としての期間が過ぎた後、彼女は次のように言っ  
ている。

私が隠棲と呼び、それから多額のお金を得ていた時  
期が過ぎて、私はまた世間に出ましたが、それはちょ  
うど、長年しまつてあつた古い食器が変色し、色あせ  
て取り出されたようなものでした。うらぶれた捨てら  
れた情婦といったところでした。また、実際その通り  
だったので (一八二頁)。

今までの生活を精算するためには、これまでつき合つて  
いた人間と会う気づかいのない所に、また、たとえ見つか  
つても彼女とは分らないようにして住まなければならな  
い。そこで、エイミーの計らいで、彼女はミノリーズ通り  
に、クエーカーの婦人の家に間借りすることになり、服装  
もクエーカー教徒の服を着て扮装することにする。こうし  
て彼女は、少なくとも外見上は過去の生活と縁を切ったこ

とになる。しかし、彼女の内面は変わったであろうか。変わったとすれば、どの程度変わったであろうか。それについて見てみよう。

#### 四 過去の清算はできたか

ロクサーナは父親の違う子供たちを何人か生んでいますが、それらの子供たちのために里子に出し、養育費を出す以外の面倒は見ず、これと言った愛情は示していない。ただ、最初の夫との間に生れた五人の子供に対しては、ある程度の愛を感じていた節が見える。ロンドンでの男性相手の生活が終りに近づいた頃、彼女は次のように言っている。

私は、自分がイギリスを離れたとき、それは十五年前のことですが、五人の子供たちを、いわば広い世間に放り出し、その父親の親戚たちの慈悲に任せて残して来たことを忘れてはいませんでした。あのとき一番上の子も六歳に達してはいませんでした。……

私はイギリスに戻ってから、子供たちがどうなっているか、みんな生きているかどうか、どんな風に養わ

れているかなどを是非知りたいと思いました。しかしまた、自分の存在を子供たちに知らせたり、また、子供たちを育ててくれている人々の誰にしても、その母親というようなものが世に生きていることを知ることなどさせないようにしようと決心していました（一八八頁）。

彼女はエイミーに命じて、この子供たちのその後の運命を調べさせ、然るべき処置を講じさせる。長女と次女と末の男の子が存命していたので、エイミーがそれぞれにふさわしい道を進むように考えてやる。ただ、長女だけがロクサーナに対して大きな問題の種となる。

この長女は、母親と同じくスーザン(Susan)という名前でも、偶然にも、ロクサーナがベルメルの邸に貴顕男女を集めて奔放な生活を送っていたとき、女中として雇われていた。女中頭の地位にあったエイミーは、スーザンがロクサーナの正体に気づく危険性を感じて解雇する。しかし、ロクサーナがベルメルでの集いを解散し、隠遁の生活に入った後も、スーザンは執拗に彼女を付け回し、彼女が自分の母親であることを認めさせようとする。この頃のロクサーナは既にオランダ商人と結婚しており、イギリスやオラ

ランダの爵位を金の力で身につけ、オランダへ渡って静かな結婚生活に入ろうとしている。そこにこの娘が現われて、ロクサーナの過去の淫奔な生活を暴露したならば、まじめな夫は、おそらく彼女を離別するであろう。前に見たように、彼女は「自分の存在を子供たちに知られ」ることは誠に警戒しているのである。

一方、娘スーザンは、名前が母親と同一であることが暗示しているように、何事かを思いついたら、とことんまでやらすには気が済まない激しい性質を母親と共有している。母親が様々な手段を弄して彼女から逃れようとし、また、エイミーやクエーカー婦人が、ロクサーナをかばおうとすればするほど、スーザンは、ますます躍起になって、母親をつきとめようとする。この執念はロクサーナにとって、正に脅威であり、彼女は「たとえあの子が天国と逆方向の地獄へ送られたとしても、私にとっては別にどうということはなかったでしょう」(二八四頁)と言ひ、また、「私が娘から逃れたいと思う気持は、ちょうど病人が間歇熱を恐れるのと同じくらい強かったことは事実です。娘がいわゆる正当な方法で墓に入ったら、つまり、普通の病気で死んだとしたら、私はほとんど涙を流すこともなかったでし

よう」(三〇二頁)とも言っている。

主人思いのエイミーは、ロクサーナには内緒でスーザンを殺害する。殺害した場所、方法その他、具体的なことは何も述べられていないが、その事実だけは読者に察知できるように次のように語られている。

エイミーは激情に駆られて、私には分からない、また私の最も恐れる方法で、始末をつけてしまったのでした。このことの詳細についてここでお話しするのは控えます(三二八頁)。

ロクサーナはエイミーに対して腹を立てた振りをして、彼女を追い出してしまふが、後に夫と共にオランダへ渡ってから、再びエイミーが現われると、娘のことについては、何も問ひ質すことなしに、彼女を家の一員として受け入れ、昔同様の地位を与えている。つまり、ロクサーナはエイミーが娘に対してなした行為を真に怒ってはいないのである。

ロクサーナの男性に対する態度が根本において打算的であり、金と名譽が主な目的であったことを前に見た。また、彼女の売女としての生活に対する悔恨が皮相的であり、心底までは達していないことも見た。

ロクサーナが娘スーザンの死を願ひ、間接的に殺人罪を犯すのは、娘の存在が自分の今まで求めてきた目標の達成に妨げとなると感じたからである。もし、ロクサーナが自分の過去を真剣に悔ひ、根本的に清算する決意があつたならば、今までの対面を保ち、夫との生活を継続させることに第一の眼目を置くようなことはなく、また、娘に対する愛情がもっと深いものであつたならば、いかなる理由があるにせよ、その死を願うようなことはなかつたはずである。スーザンの死は、ロクサーナの生き方の総括として不可避な結果であつたと言えよう。

『ロクサーナ』を、デフォーが奉じていた蓄財論の具体的表現として徹頭徹尾論じているのが、一九八七年に出たブラム・ダイクストラの『デフォーと経済学』(Deftoe and Economics)である。彼は、「デフォーが興味を持ったのは姦通の問題ではなく(この話題が読者を引きつけるであろうことは承知していたが)、むしろ、売春の商業的局面であつた」と言い、また、「売春の世界においては、人間は厳密に道徳的な考慮に束縛されていることはできない」とか、「売春はほとんど常に犯罪の上に立っている」とも言つて、ロクサーナの売春と彼女をめぐる男性たちの生き方を経済的

取り引きの角度からのみ見ている。

ダイクストラは、ロクサーナにとっては愛情や性欲は問題外なので、彼女の男性たちとの対応の仕方の特殊性は、この点から説明できるとしており、また、経済運営の時代的变化を示すものとして、ロクサーナの關係を持った男性たちの財産処理法を論じている。ロクサーナの最初の夫が怠惰な浪費家だつたのは、不適當な商人の見本であり、宝石商が、宝石の現品を持ち歩いて危難に遭うのは、古い商取引引きの方法に従つていたからである。また、プリンスが財産を有効に増やすことを知らず、消費のみに徹しているのは、古い貴族階級の生き方であり、オランダ商人が財産の増殖に巧みで、また、現品を扱わず手形取り引きの方法に従つているのは新しい型の商人の代表なのだといふ。そして、貴族、紳士たちは譲られた財産を固守するのが精いっぱいだが、商人は、流通操作によつて財産をふやすことを知っている。「財産は池、<sup>(8)</sup> 商売は泉」(An Estate is a Pond, but a Trade is a Spring)などといふデフォー得意の句も援用されていて、このように見てくると、『ロクサーナ』は後に出版される彼の『英国商人大鑑』(The Complete English Trades-man, 1726, 27)の実践編とも考えられそうである。

ダイクストラの説く所は、『ロクサーナ』を独特の固定された視点から見たものとして面白いが、ただ、物語の終りの部分にスーザンの出現と殺害に関するエピソードを加えたことについて、「当時の普通の物語は四百頁から成り立っていたので、デフォーもこの部分を加えることによつて物語をそれだけの長さ<sup>(9)</sup>に伸ばし、それにふさわしい報酬を受け取ろうとしたのだ」とし、つけ足した部分は、それまでの主要な部分と何ら有機的関連のない蛇足であると言っているのは首肯しかねる。前に述べたように、ロクサーナの生き方の不可避な結末としてスーザンの死は十分な重みを持っているのだ。

さて、このような生き方をしたロクサーナが、最後まで幸福に留まったのでは、勸善懲惡を好む読者は不満に思うであろう。そこで、この物語の結末は次のようになってい

ランダで、何年か景気よく、表面上満ち足りたように見える生活を送った後、私はひどい災難に遭い、エイミーも同じ目に遭いました。前の順境の正反對でされた。私たち二人によって、あの哀れな娘に対してなされた悪業に、天罰が下されたのです。私は元の木

阿弥となつて逆境に沈み、私の不幸が罪の報いであつたと同様、私の悔恨もまた不幸の結果に過ぎないように思われました(三一九—三〇頁)。

但し、どのようにして、どんな災難に遭つたのかは一切語られていない。それを詳細に記すことは、物語のこれまでの一種伝奇的な雰囲気をぶちこわすことになるのを、作者は恐れたのであろう。

更にまた、政争の闘士として、支配者のスパイとして、また、日和見的とも呼ばれかねない、時世により主張の変わるジャーナリストとして、多くの敵を持つていたデフォーは、自分のアイデンティティを世間にさらさないよう警戒する必要があつた。ロクサーナが転居、扮装、嘘言その他によつて自分の正体を隠そうとする試みには、デフォー自身の生き方が投影されている可能性がある。だからこそ彼はロクサーナの悲惨な最後を詳細に描く気になれなかつたのだという憶測も成り立つかもしれない。晩年に、借財不払の廉で逮捕されるのを恐れて潜伏中、陋巷に窮死したと伝えられるデフォー自身の運命も思い合はされる。

さて、デフォーは、どういう効果を目ざしてこのような

小説を書いたのであろうか。

男性中心の世間に伍して、ロクサーナが賢明に、逞しく生きることの小気味よさということも、ある種の読者にとっては魅力の一つであったかもしれない。そして、手段はともかく、大変なベースで富を増やしていく彼女の「出世」ぶりは、庶民の夢を実現してくれたものとして快く映ったことであろう。富の蓄積の目標の前には、性愛など物ともせぬという生き方も、一事に徹底した者のいさぎよさと呼べないこともあるまい。また、その反面、蓄財に専念して、愛を忘れた女の哀れさと見る読者もいたかもしれない。

また、もし結末の部分に特に重点を置くならば、人間は結局、自然に反する生き方はできないのだ、一時は成功しても、最後にはその報いを受けることになるのだという教訓談として解釈することも可能であろう。

そしてまた、デフォーは読者のポーノグラフィクな趣味を満足させようとしたのだという見方もできよう。作者は、「はしがき」に次のように記している。

もし、彼女の物語の中に、不道徳な行動を述べざるを得なかった際に、余りにもはつきり叙述し過ぎてい

ると思われる部分があるとしても、筆者は、みだらな描き方や、慎みのない表現は避けるようあらゆる注意を払ったと申し上げたい。不道徳な気持をそのかすような点は皆無で、すべてそれを戒め、非難するものばかりであることに読者は気づかれるであろう。

犯罪の場面を描くと、それを犯罪のための参考にする者が時々現われるということはあり得る。しかし、犯罪が軽蔑すべきものとして描かれれば、人々はそれを愛するようにはならず、真相を知るのみである。もし読者がそれを悪用するとすれば、罪は読者自身にある。

デフォーのこの弁明は、むしろ彼自身がこの小説の含む要素の危険性に気づいていたことの証左となるであろう。

作者の究極において目ざしたものについては結局推察するより仕方なく、デフォー自身も多くの作家同様、問いつめられれば答えに窮したかもしれない。

この関連において、ジェイムズ・サザーランドがそのデフォー論の結びで言っていることが思い出される。

実際、デフォーの言動の動機を解きほぐすことは困難な場合が多い。我々が彼に関して犯す最大の誤り

た、この間の動機が流し直截で単純であつたと思ふは  
たゞしである。<sup>(9)</sup>

(本文の尾綴は Oxford English Novels 及び後見。)

(註)

- (1) Maximilian E. Novak : *Economics and the Fiction of Daniel Defoe*, pp. 131-32.
- (2) Bram Dijkstra : *Defoe and Economics*, pp. 28-29.
- (3) John J. Richetti : *Defoe's Narratives*, p. 86.
- (4) Bram Dijkstra, op. cit., p. 20.
- (5) *ibid.*, p. 19.
- (6) *ibid.*, p. 169.
- (7) *ibid.*, p. 22.
- (8) *ibid.*, p. 15.
- (9) *ibid.*, p. 80.
- (10) James Sutherland : *Daniel Defoe, a Critical Study*, p. 232.